

エチオピア北部史研究を始めて

石川 博樹

私が専門とするのは、ソロモン朝治下のエチオピア北部史であり、現在のところ主に16世紀から18世紀までの期間を対象としている。ソロモンの後裔と称するユクノ・アムラクによって1270年に創始され、キリスト教を信仰するアムハラ族を主体としたこの王朝は、15世紀にザルア・ヤコブ王の下で最盛期を迎えた。しかしレブナ・デンゲル王（在位1508-1540年）の治世に、まず東方からムスリム勢力の攻撃を受け、さらに南方からオロモ族が大挙北上を開始した。特に、アムハラ族に「ガッラ」という蔑称で呼ばれたオロモ族の進出の影響は大きく、エチオピア北部は大混乱に陥った。この時点での滅亡は免れたものの、18世紀後半にはソロモン朝の支配力は低下し、有力者間の抗争が慢性的に続くようになる。その後、19世紀末になってメネリク2世がこうした混乱状態に終止符を打ち、彼の創始したエチオピア帝国は1974年の社会主義革命まで存続することとなる。

イスラムを受容した地域を除いて、その大半が無文字社会であるサハラ以南のアフリカにおいては、ヨーロッパ人到来前の歴史を明らかにすることは困難である。しかしエチオピア北部については、アムハラ族が歴史に関する文字資料を残し、天地創造やキリスト生誕を紀元とする暦を用いて、王の即位年等を記録したため、上記のような歴史記述が可能となっている。

さてソロモン朝宮廷ではアムハラ語が話されていたが、文書作成の際には、エチオピア北部に1世紀頃に成立したアクスム王国の言語で、その衰退後も書き言葉として存続したゲエズ語が用いられていた。なおアムハラ語が書き言葉として本格的に使用され始めるのは、19世紀後半になってからである。

ソロモン朝の歴史を研究する上で、まず第1に挙げられる史料は、ゲエズ語で書かれた諸王の年代記

である。13世紀から15世紀までの期間については、この王朝の最盛期を築いたザルア・ヤコブとバエダ・マルヤムという2人の王のもののみが知られているにすぎないものの、16世紀以降の王たちの年代記は比較的多く伝存しており、王の行なった遠征、種々の役職の任免などの記事が記載されている。

年代記以外のエチオピア語資料としては、まず16世紀後半に、オロモ族の進出の経過をゲエズ語で記したバフレイの『ガッラの歴史』や、日本語に訳せば同じタイトルとなる、オロモ族の進出と近代エチオピア帝国の母胎となったショア王朝の発展を、アツマ・ギヨルギスがアムハラ語でまとめた著作を挙げるができる。また王が修道院や教会に土地を与えた際に、それを証明するために与えた文書、貢納のリスト、そして有力者たちが交した書簡なども存在する。

18世紀から、ヨーロッパ人旅行者が多数これらの資料を本国へ持ち帰るようになった。その結果、大英図書館、パリの国立図書館、そしてオクスフォードのボドリアン図書館を始めとするヨーロッパ各国の図書館は、多くの貴重なエチオピア語写本のコレクションを保有するに至った。またエチオピア国内においても、エチオピア研究所等が文書の収集とその保存を行なっている。なお、エチオピア写本マイクロフィルム図書館が所蔵する写本フィルムの目録の刊行が、現在続けられている。詳しくは、拙評「ゲタチュウ・ハイレ、W・F・マコンバー編、エチオピア写本カタログ」（『東洋学報』第80巻第2号、1998年、8-14頁）を参照していただきたい。

ゲエズ語及びアムハラ語資料とともに重要なのが、エチオピア内外のムスリムやヨーロッパ人によって書かれた資料である。

まずムスリムの資料としては、前述のレブナ・デ

ンゲル治下のエチオピア北部に対する遠征を描いた『ハバシャの征服』や、17世紀中頃にソロモン朝宮廷を訪れたイェメン使節の報告といったアラビア語資料が知られている。またオスマン朝は、1517年にエジプトを陥落させた後に紅海周辺地域へも進出し、エリトリアの紅海沿岸地域にハバシャ州を置いた。この州に関するオスマン朝の記録も残されている。

ヨーロッパ人の記録としては、まず16世紀前半にポルトガル使節の一員として、レブナ・デンゲルに面会したF・アルヴァレスが、帰国後その見聞をまとめた『インドのプレステ・ジョアン』が挙げられる。この旅行記については、岩波書店から『エチオピア王国誌』として邦訳が刊行されている。これは1889年に復刻された1540年版のポルトガル語テキストを、我が国有数のポルトガル語研究者である池上岑夫先生が翻訳なさったものである。

16世紀後半になると、イエズス会がエチオピア北部においても本格的に布教を開始した。17世紀初頭に布教活動を行ったP・バエスを始めとする宣教師たちは、エチオピア北部の地理、歴史、そして文化などについての著作を著わすとともに、かのフランシスコ・ザビエルと同様に、ローマのイエズス会本部などとの間に多数の書簡を交した。これらの著作と書簡の主なもの、C・ベッカリによって校訂され、『16世紀から19世紀にかけてのエチオピアに関する未刊行のヨーロッパ文書』と題する全15冊のシリーズに収められている。

イエズス会の布教は一時成功するかに見えたが、最終的にはエチオピア教会との対立から失敗に終わり、宣教師たちは追放される。その後18世紀後半になって、J・ブルースがナイル川の水源を発見するためエチオピア北部を訪れ、彼は帰国後その旅行記録を、『ナイル水源発見の旅』として発表した。全5巻からなるこの旅行記は、ブルースが『青ナイルの水源』に到達するまでの経過のほかに、エチオピア北部の歴史や文化など多岐にわたる分野の豊富な記述が含まれており、その史料的な価値は極めて高い。なお長島信弘、石川由美氏の翻訳によるこの旅行記の抄訳が、『ナイル探検』と題して、岩波書店から刊行されている。

これらソロモン朝史の研究に必要な資料については、海外の古書店から入手したほか、国内の研究者の方や研究機関からお借りしてコピーするなどして

いる。特に、日本におけるエチオピア諸語研究の第一人者である金沢大学の柘植洋一先生には、貴重な資料を多数お借りした。この場を借りて改めて感謝の意を表したい。また国立民族学博物館、国立国会図書館支部東洋文庫、そして東京大学総合図書館といった研究機関は、エチオピア史関連の重要な文献を数多く所蔵している。

ところで帝政期のエチオピア史記述においては、キリスト教徒勢力、特にアムハラ族を主体とする王国、つまりアクスム王国、ソロモン朝、そして近代エチオピア帝国に、大半の紙幅が割かれ、その栄光が強調された。アムハラ族に注目し、賞揚するこうした偏った記述の背景には、文字資料のみを歴史を復元する手段としたため、必然的にアムハラ族の王国が中心になったという事情は差し引いたとしても、やはりメネリク2世やハイレ・セラシエがこの民族出身であり、その支配の正当性を示すとともに、帝国の国際的な地位を向上させようとする意図がなかったと言いきれない。

これに対して、1974年の帝政崩壊前後から、従来は等閑視されるか、あるいはキリスト教徒文化の破壊者というネガティブな役割しか与えられてこなかった、オロモ族を始めとする他の民族や、ムスリムの歴史を対象とする研究が進められてきた。例えば、モハンメド・ハッセンの『エチオピアのオロモ』は、オロモ族のマチャ集団がエチオピア西部のギベ川流域に進出し、5つの王国を築いて繁栄するまでの歴史を研究したものである。本書について、筆者は『オリエン』第41巻第1号（1998年、169-175頁）において、その書評を行なった。

こうした新たな研究の進展にともない、アムハラ族史の研究においても、そうした研究の成果を取り入れつつ、この民族と彼らを主体とした王国が、エチオピア及びその周辺地域において、どのような歴史的な役割を果たしたのかを、より具体的に、そして客観的に解明することが必要となろう。

私自身は16世紀から18世紀にかけてのエチオピア北部史に注目している。ソロモン朝最盛期と近代エチオピア帝国時代の間に位置するこの時期は、キリスト教徒の勢力が弱まる単なる混乱期とエチオピア史研究者たちにみなされて、これまで十分研究が進められてこなかった。しかしこの時代は、13世紀以来続いたソロモン朝の支配力が低下する一方で、エチオピアの総人口の半数を占めるともいわれるオ

ロモ族が大挙北部へ進出し、また近代エチオピア帝国の母胎となったショア王朝が台頭する、現在のエチオピアの基礎が形成された時代である。そうした諸変化の実態を解明することは、近代エチオピア帝国成立後のエチオピア史を理解するうえで、必須の課題と思われる。

拙稿「エチオピア王国ソロモン朝の衰退と州統治者」(『史学雑誌』第107編第4号、1998年、1-38頁)において筆者は、18世紀中頃にソロモン朝統治領域内の地方統治者が軍事力を強めるとともに、オロモ族が多数それに任命されるようになったことを指摘した。これは、近代エチオピア帝国が形成された19世紀に顕著になる、地方統治者の力の増大とオロモ族の政治的な地位の向上という2つの動きが、いつ頃から史料上で確認できるようになるのかを明らかにしたものである。

このような研究を進めるうえでの問題点としては、エチオピア北部の場合、現地側の文字資料があるとはいっても、歴史研究に用いることのできる文書の数、それほど多くないことがまず挙げられる。文書の大半がキリスト教関連のものであり、行政文書などがほとんど残されていないなかで研究を

続けるため、今後は、ムスリムやヨーロッパ人の記録を最大限に利用するほか、いわゆる史書ではない、宗教関係文書などにも、歴史研究の可能性を探るつもりである。

次に、研究上必要となる言語が多数あることも悩みの種である。私の場合、年代記はゲズ語、イエズス会士の報告は大半はポルトガル語であり、この他にアラビア語、英語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、そしてラテン語等が必要となる。虻蜂取らずに終わらないように努力したい。また19世紀後半から20世紀にかけてのエチオピア史の研究者は比較的多いものの、16世紀から18世紀までを専門とする研究者が少なく、発表される論文に限られていることも問題の1つである。

しかし目下のところ、エチオピア北部の史的発展の解明に寄与するような研究テーマを見出すことが、最大の課題である。研究を始めてまだ日が浅いとはいえ、様々な先行研究を参考にしつつ、早くそうしたテーマを見つけたいと考えている。

(いしかわ ひろき)

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)

北東アフリカ情報ネットワーク

【日本エチオピア協会ニュース】創刊

日本エチオピア協会は、1998年からニュースレターの刊行を開始した。A4判4頁。編集発行人は同協会の宮田治氏。最新号の第3号(1999年5月)には、同協会が主催した「エチオピア料理の夕べ」の報告、アディスアババで開催された「日本文化週間」の報告、帝政時代に宮廷女官として勤務した荒牧真理子氏のエッセイなどが掲載されている。問い合わせ先:東京都中央区日本橋2-7-4 大同生命ビルB1 日本エチオピア協会。

Sudan Dispatch 創刊

カイロに本拠を置くNGO、Sudan Development Initiative Abroad (SDIA) が、ひろくスーダンの開発問題をあつかう季刊雑誌 *Sudan Dispatch* を

創刊した。開発問題だけでなく、スーダンの文化、芸術、歴史、市民社会と教育などの諸問題を論じる非政治的な雑誌であると編集方針に述べられている。刊行にさいしてはフォード財団の援助を受けている。創刊号(1998年1月)はA4判34頁。巻頭エッセイは、Safaa El-Tayebの「スーダンにおける教育と開発」である。最新号である第6号(1999年4月、52頁)には「エジプトにおけるスーダンのNGOと市民社会」「UNHCRと難民」といったエッセイが所収されている。年間購読料は個人30ドル、学生20ドル。問い合わせ先: Sudan Dispatch, 33 Abdel Khalek Tharwat Street, Cairo 11511, Egypt. E-mail: sdispatch@sudia.org

栗本英世